

理学療法の国際協力

2 障害と開発に向けた JICA の取り組み

国際協力機構 (JICA) 人間開発部 社会保障チーム 合澤 栄美

JICA は「障害と開発」に取り組むことにより、すべての障害者の人権の尊重、完全参加と平等およびインクルーシブな社会の実現を目指している。また、「障害と開発」は、JICA が取り組んでいる保健、教育、インフラ整備といった開発課題とも密接に関係しており、これらの開発課題の解決にも貢献する。そのため、障害をこれら他の課題から切り離すのではなく、他の課題に組み入れること、すなわち障害インクルーシブな開発を実践する必要がある。

このような課題へのアプローチとして、JICA では、「障害主流化の取り組み」と「障害に特化した取り組み」を組み合わせるツイン

トラック・アプローチを推進している。また、同様に重要なアプローチとして、当事者中心(障害者が中心となって意思決定や事業実施がなされること)、アクセシビリティ、地域社会に根差した取り組み、障害に関する啓発を重視している。これまでの協力の実績や、そこから得られる教訓をふまえ、地域社会に根差したリハビリテーション (CBR) や地域社会に根差したインクルーシブな開発 (CBID) などの効果的なアプローチや留意点、課題を紹介する。また、このような取り組みの中で、理学療法士の果たす役割に対する期待を提示する。

理学療法の国際協力

3 JICA ボランティアにおける理学療法士の活動

国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊事務局 渡邊 雅行

JICA ボランティア事業は、①青年海外協力隊、②シニア海外ボランティア、③日系社会青年ボランティア、④日系社会・シニアボランティアの4つからなり、日本政府の政府開発援助 (ODA) 予算によって実施されている。2015 年は 1965 年ラオスに初代青年海外協力隊員が派遣されてから 50 周年に当たり、現在までに 39,000 人以上が参加している。また、JICA ボランティア事業全体の参加者は 46,000 人以上にも及んでいる。JICA は開発途上国からの要請に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために活かしたい」というボランティアを募集し、選考、訓練を経て派遣している。①開発途上国の経済・地域復興への寄与、②友好親善・相互理解の深化、③国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元をこの事業の目的としている。

理学療法士については、1979 年に 2 名がコスタリカに派遣されて以来、2014 年 11 月末までに 456 名が青年海外協力隊に参加し

60 か国で活動している。また、シニア海外ボランティアには 12 名の理学療法士が参加した。配属先としては、病院等の医療機関、高齢者や障害児・者のための社会福祉施設、学校、コミュニティ・ベースド・リハビリテーション (CBR) や福祉関係 NGO 等があげられる。また、無償資金協力で建設されたリハビリテーションセンターや、技術協力プロジェクト関連の施設や地域に派遣される場合もある。

任国の活動には、臨床活動や技術移転、家族や実習生、CBR ワーカーへの指導、勉強会開催や政策提言なども含まれる。海外で経験を積むことは深く人間や文化を考えるきっかけとなり、臨床家としての成長につながる。帰国後に災害支援活動に参加する JICA ボランティア経験者も多い。「世界に笑顔を届けるシゴト」を通して国際協力への第一歩を踏み出す理学療法士が増えることを強く望んでやまない。